

氏 名 : 中村 敦雄
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第 96 号
学位授与年月日 : 平成 3 1 年 3 月 1 5 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士
学位論文名 : 国語科教育における能力主義パラダイムの成立過程
論文審査委員 : (主査) 教授 千田 洋幸
(副査) 教授 佐藤 正光 教授 戸田 功
教授 寺井 正憲 教授 野中 陽一

学位論文要旨

本研究の主題は「国語科教育における能力主義パラダイムの成立過程」の解明にある。能力主義は、1954 (昭和 29) 年に提唱され、昭和 30 年代以降の国語科教育を方向づけた。

序章では、先行研究を踏まえて定義を整理し、主題の設定と研究方法について言及した。定義としては、能力を「何かを学習し得る力」ととらえ、「能力を教育の目標に位置づけ、その効率的・効果的な育成を重視した教育学的なイデオロギー」とした。能力主義には複数の意味内容もあることから、「能力主義パラダイム」という造語を使用した。研究方法に関しては、戦前期から起筆して能力主義パラダイムが安定期を過ぎた 1980 年代までを対象に、研究の裏づけを持つ「理論」と、実践に根ざした「フォーク・セオリー」の消長を検討する方法と、具体的な事例をもとにパラダイムの生成過程を逆照射させる方法とを採用した。

第 I 部では、戦前・戦中期を取り上げた。国語科教育学が「学」として形成されていくなか、「力」が理論的・実践的に解明されていく過程を取り上げた。

第 1 章では、「力」について、理論的研究の展開を扱った。1922 (大正 11) 年の『国語の力』で、垣内松三は、学習者側が培う力と、国語の側に備わる力とを挙げた。垣内は後者を究明し、「動力としての国語」という概念によって、国語が有する力の意義を説いた。

第 2 章では、「力」が把握可能な対象として実践的に具体化されていく過程に迫った。戦前・戦中期は国定教科書が教材・教育内容を規定していた。教科内容についての意識は弱かったが、1930 年代後半から語法への関心が高まり、西原慶一や興水実は教科内容を整序したモデルを提案するにいたる。これらの成果は 1941 年に開始された国民科国語に反映され、読解力という用語も登場し、語法的訓練や音声言語活動が盛り込まれた。

第 II 部では、敗戦から 1954 (昭和 29) 年までの動向を検討した。経験主義の受容が進むにつれて、かえって能力への関心が喚起されるようになった経過を取り上げた。

第 3 章では、占領期に C I E (民間情報教育局) のサゼッション (示唆) によって経験主義が導入された過程を検討した。昭和 22 年版学習指導要領の作成過程において、戦前・戦中期の蓄積を踏まえた石森延男の案が否定され、C I E が示唆した社会科との統合を想定した枠組みのもと

で同要領が編制された経緯を中心に、同時代の動向を解明した。

第4章では、昭和22・26年版学習指導要領や研究者の所説を検討した。経験主義のコンテクストのもと、「技能・能力」についての理論やフォーク・セオリーが構築された経緯を解明した。

第5章では、昭和26年版学習指導要領を契機に台頭した「機能文法」の動向を検討した。戦前・戦中期の語法指導の再燃であり、戦後期の「技能・能力」と相補的な位置づけで捉えられていた。国語学においても議論が起こり、学際的交流の機運が生じた。

第6章では、1954年に全日本国語教育協議会で開催された協議「経験主義か能力主義か」を取り上げ、能力主義の誕生過程を明らかにした。経験主義への評価の相違や、戦前・戦中期の教育遺産の復権をめぐる思惑が交錯していた実態に迫った。

第Ⅲ部では、1955年以降、能力主義パラダイムが高揚していく過程を取り上げた。

第7章では、1956年に実施された第1回文部省全国学力調査を取り上げた。問題と解答結果の妥当性について分析し、同調査の意義や、その後に生じた波及効果の功罪を検討した。

第8章では、昭和33年版学習指導要領の「技能・能力」記述に影響を与えたコンポジションについて、導入の経緯や国語科教育への影響を解明した。

第9章では、学習指導要領の「技能・能力」記述を補完する役割を担った理論としての読解やスキルについて取り上げ、その意義や機能を明らかにした。

第10章では、昭和33、43、52年版の学習指導要領の生成について取り上げ、能力主義パラダイムが安定期へと向かう過程を解明した。次なるパラダイムの萌芽についても言及した。

第Ⅳ部では、具体的事例から逆照射させることで能力主義パラダイムの成立過程に迫った。

第11章では、事例として段落指導を取り上げ、文法論的文章論やコンポジションからの延伸と、読むことの学習指導の発展の二つの方向から成立した経緯を明らかにした。

第12章では、同一教材に対する教材研究・学習指導記録の事例をもとに、通時的変遷に迫った。「つばめはどこへ行く」で1936年から1954年、「せんこう花火」で1956年以降の展開をとらえ、第Ⅰ部から第Ⅲ部の研究成果を実践の側から裏づけた。

終章では、以上の論述を踏まえて、合衆国の理論に起源をもつ「技能・能力」が国語科教育に最適化される過程を経たこと、フォーク・セオリーの生成に関わっていたことがパラダイム成立過程にとって重要であったことを結論づけた。さらに、その問題点、今後の課題にも言及した。